845-2-1

一據集

全

俳諧資料カード

年代	弘化乙巳
編者（筆者）	内藤
書名	一據集
備考	

（下垣内蔵）

一樹知百川

味

右蕉翁文中之語
應需前後軸獄之書

鳴啄亭藏本

東京都豊島区巣鴨三丁目三番地
土肉和人
電話〇八三三(九七一)九八五番
テ73

一摘集序

さくら葛亭の叟俳句を好ミ
常ニ流々方ニ随ひとゝろ其
かいつ然おのか説池これをおの
判し之遂ニ四附梓ニ紀ひ時くの新
編を世ニ先然んと予ニ所望一語

流行とハ流行て然れと撰まれうぬく
むまちと新みりしてもとの秀ニ
をゐ流ちあち句ち佳句も出
よりしされハ一句ハ一摘乃茶のめし
まて此集ニ然はつつあちらし
于時...もうまくて遊翁記

梅花

二せうく家の
さくらや見乃梅

[illegible]
つくるなる業ゑ

[illegible]
枯[illegible]
みるり枯れ

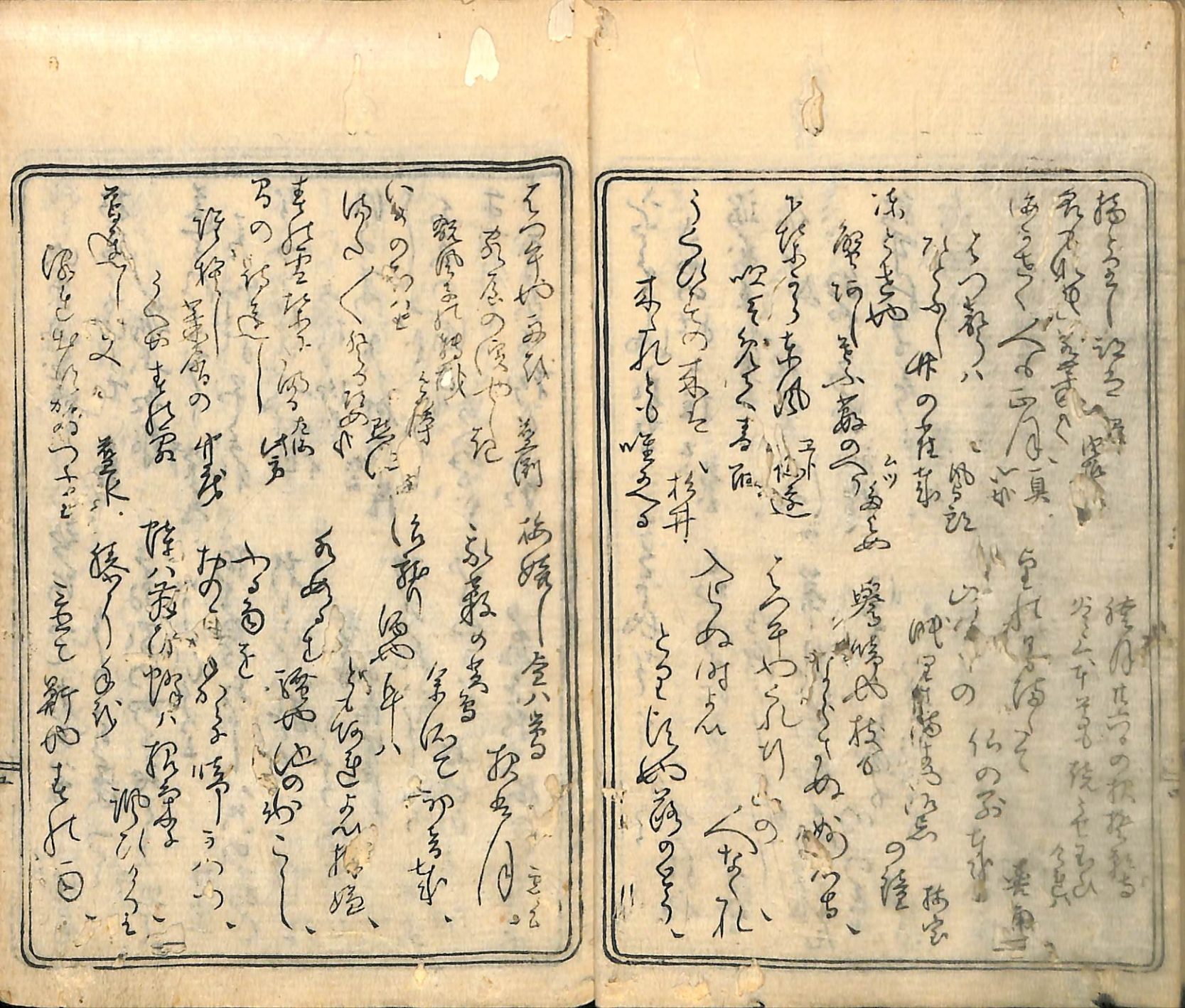
[illegible]
[illegible]
きこえて消えぬる

一生不[illegible]
きしの[illegible]

[illegible]
枯くなく梅

井[illegible]
[illegible]

七十七
梅つる



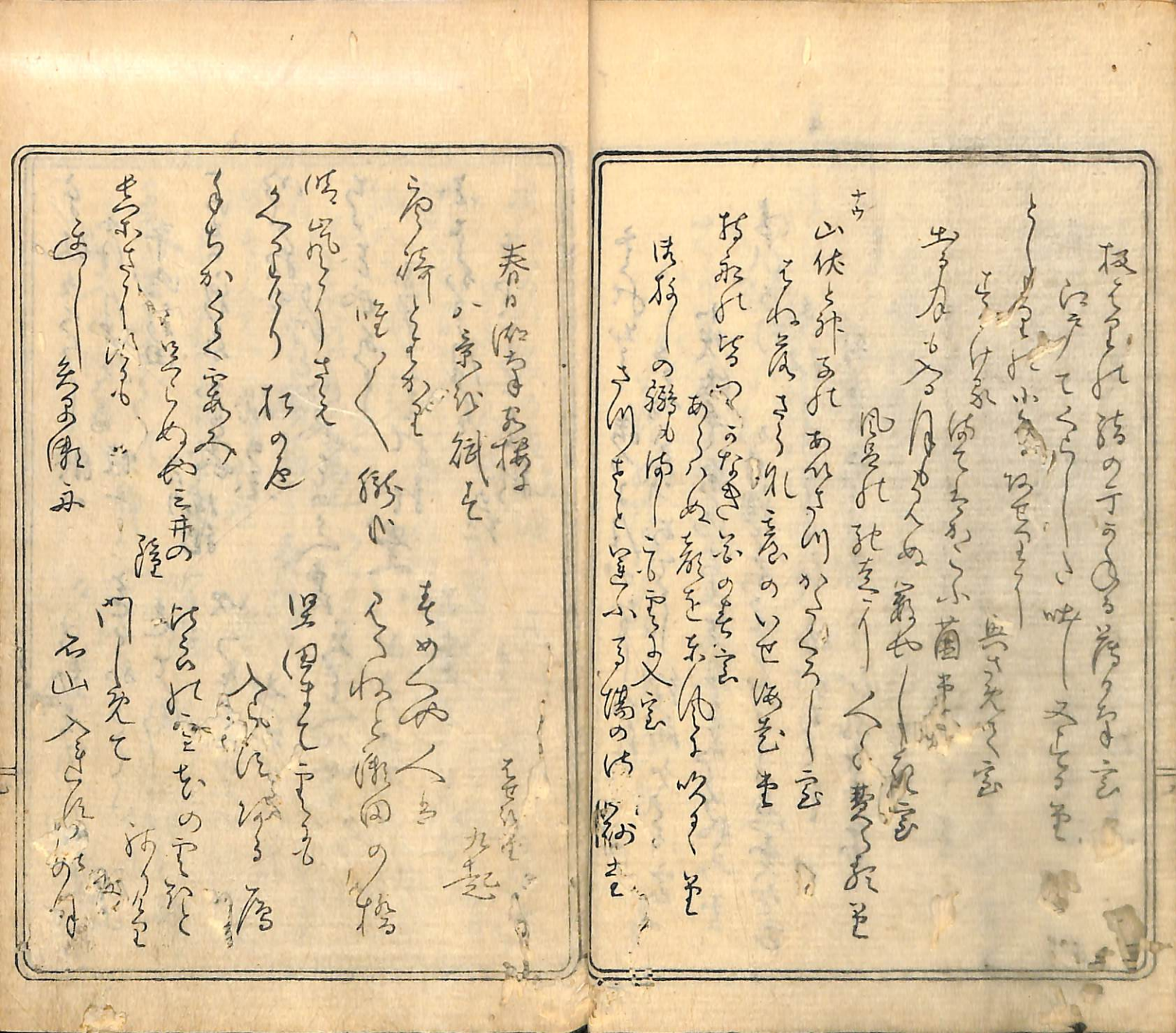
鳴余所宝鶯　咲にも梅あるを　梅信
梅は手もかけて鶯　ちりかゝる葉つゝく
絹ふ梅の鶯　二葉の柳も新て
遠ざれとくし　京羅
春柳枝芽出の花　梅室
あゝ花あけしハたゞの鶯や
なふらはゞ人生花　梅ふ
右柳る梅や　梅ふ花ゝ　鶯ひ
風の春る方八柳の花(?)　松翁
さしこむ　木之下
花色の深き　哀れハ世し　之の
あくあかゝ　梅やうなり
まづれく　梅もひしもの
高く飛ぶる柳の枝　与花を花て梅のむし　英泉

春はたゞと　花菱
峰まで　鶯ゝも
鳴そらひと柳陰　花のもと鶯館と　花信
桜さま咲そる　花あまて人は様西馬
中にえしばり　ひとつく花る春(?)ゝ　松露
ちる限り雪つく　花風(?)
花咲花よ　花葉室　よ藪中一枝よ
しらくもやしの里恵女
人のこゝろより萬壺　連雀の中を　ホ種(?)の
花咲けて花盛の　葉の花(?)二　とく見しあひ　梅室
のちはざまに　さなくなりの　花く花もなへ
脱るはるかや花よ　隠れに花咲く　田の陰　夜波慶

[illegible]

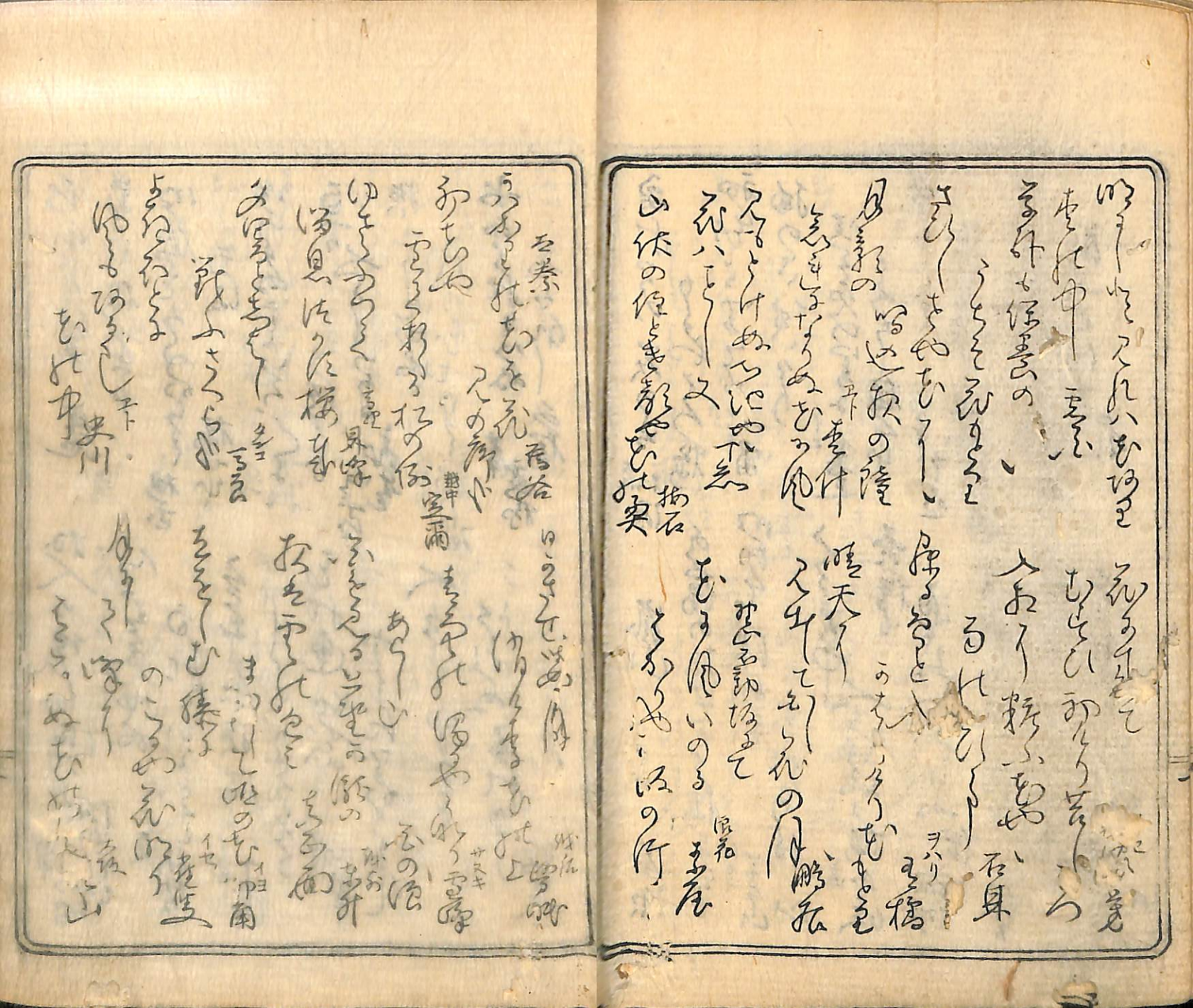
縫かゝる青柳し川も織る燕　重
紙子
　霜晴てにほふ茶畠　宗
ゐるつまびらかに唱ふく　重
流れくる水のゆく韻ゆる　宝
枕ひとつ夜すがら小猫　重
ウ
松の月帳よ
宗とふまて紀　宿とみらはゝふ
　朱ふるほつ　宝
坊のわき　縁を数十まきて　宝
縫より放ちハ高札探婦よく　重
姉よし　浮風ゆれる　宝
宮ゆの菖蒲も小舟の長者　重
かくれなき
　手け此頃風あし　ゆむ　宝

あれ出て旅する身の哀しる月
　さむしあそし　経便久しる　宝
小院縁て余所もちもかりやみ　重
遠ひおり　綿かもらけし　忘れ実宝
　夜とし　うつされたれあさ　重
ナヲ
　射ても糸とるもふきる　宝
一筋れ寄るせて山入世　重
　なれとふねの去る月　重
　ちるる乳　荻も行ふとめ女　重
うたかたを
　年し　本洗く　積てころ　渡ろち　宝
　寒し　ふかし　ゆく　梅　重



生ゑくらし織の　言訣まりて
宵は名残　言　嵯峨一　きくからくさ　[illegible]山
平嶋新田　急て行し　ぐさ梅
一里の新気　おゑ哉　梅経　ヨハリ　咲つもる岩の　アワ　山蔭
咲散の　桃の花　志くそ哉　さくら
かげと咲る哉ものうき露　ゑくハ咲きてぬ
ちるもおもり　山さくら　芹
近くなれ　穀思丈
ふるかうして　[illegible]
言そよ木に　紹

見れなの嵐の音　古枝　松陰　嵐山　[illegible]
かるかろ桜　水鶏の静てちる桜の筝
神もひらけてか　一箱　咲ては　あ　巴仙　葛山
猶のさきつけり　もひれあり山
咲残の宮ら　イロ　篤之　入る宮中　人も咲も又桜雲　三田
うつり桜かな　青桜も
夜もうんで　かな　道にぬれやり　桜　柳
あをあ桜く出るさくらんか　咲もあくら桜を　拙誓
茅の[illegible]　平下　宗静　一くるま　地の上
落つくらくら花　又とけあろん桜　[illegible]花



鶯や鮑まで
花紙入るつゐ里　風紀
咲ならで
咲くある花を
何らしれぬまれば　吉兆
花ちるや
今帰花の嵐や里　芳苞
嵐山秋も　曲阜
それのも月なき
秋とそ戸あかき

梅田松兵
ならもとて宿り
折りや隣りの里　正池
吉兆
谷ろやまく行る
花の道何り　林程
堺らぬ
桜もともに　西信
も在
過てかる花
しらかもさの里
青布淡厳

すゞしさや
あぢの里まで　西信
鳴鶯もの
さとつらき
さらぬ秋よ
大和紀の中よ
花見の枝て　杜荻
もえれいわん
さむもの言葉
お名に
それの花紀ちよ
とゆるらし
ゆきされ

[illegible]
一心り居　梅程
春秋は草喜見中も桜　如舟
花守より酒さる
くらり行きて
人とよし
に杖つく　菊堂
花のもとつれ
むれちる
秋花
東紫花わく
くて
柳より
花は花香
松さくら　風紀

○ いなは三国の内二宮
糸も宮ハ来遠了行て
神もひかるさう的浜つきくる
水てきのふよりの白浪
やむ仮しを封文に言し
名にあふ江のさよ越えて
見わたせ色くハ
ひよまくろれ
浪花は
くもりさも淡路
きつらん春深し

白妙の歌よりも
是非秋のゆくさくら
屋の株川まて
雪とけそてしは山なる
名山をあちこち
白雲れ春の宇京る
さくら見ゆきハ

風早吹く
宇原杉梅部
草枝山

萬花の鶴のうまかた
如やま

此浦のさくらは越して
海の名あれあくらの花
さそれ言ぞなよ

○ 伊勢参宮の帰なる
吉玉川をわたるも

○ 川とては宵のなかゆて
名をし
若川

○ 言歌を殺代旅駿の張
是の糸宮ハここし如実れハ
これ江を行とも
ひとし道をあち

○ 湖月のさくら
数々を発の庵を
月を咲く鳥の花
なら紅よ白妙の桜の流れ
京ハらはまみゆれ心も花
やろうそてたく

月花のならぬ
六字部
至十二章
吟山
梅堂老人

咲花も大津運帯の色　菊本渓尾

いつきえて見るも若葉や
かるの夏　義仲も康ぶ二章

咲くるも咲つこさしや塚の側

夜うきるとよの宿笑や往くるも
楚山眺望

梅ならて花てかくれぬ夜柳

玉山の席

帆子来て走しる小舟の日傘　其

猪木の町を来て

蛙こそしに七浪よるかさつきる

花乗り七歩女のる手帳のゆくを

鉄つくり
ゆかて来る流しの花

花しも明けのよ
とましき詠草

梅花祐

何や花も紅秋の海を猿しそ

降まらしのさ花し

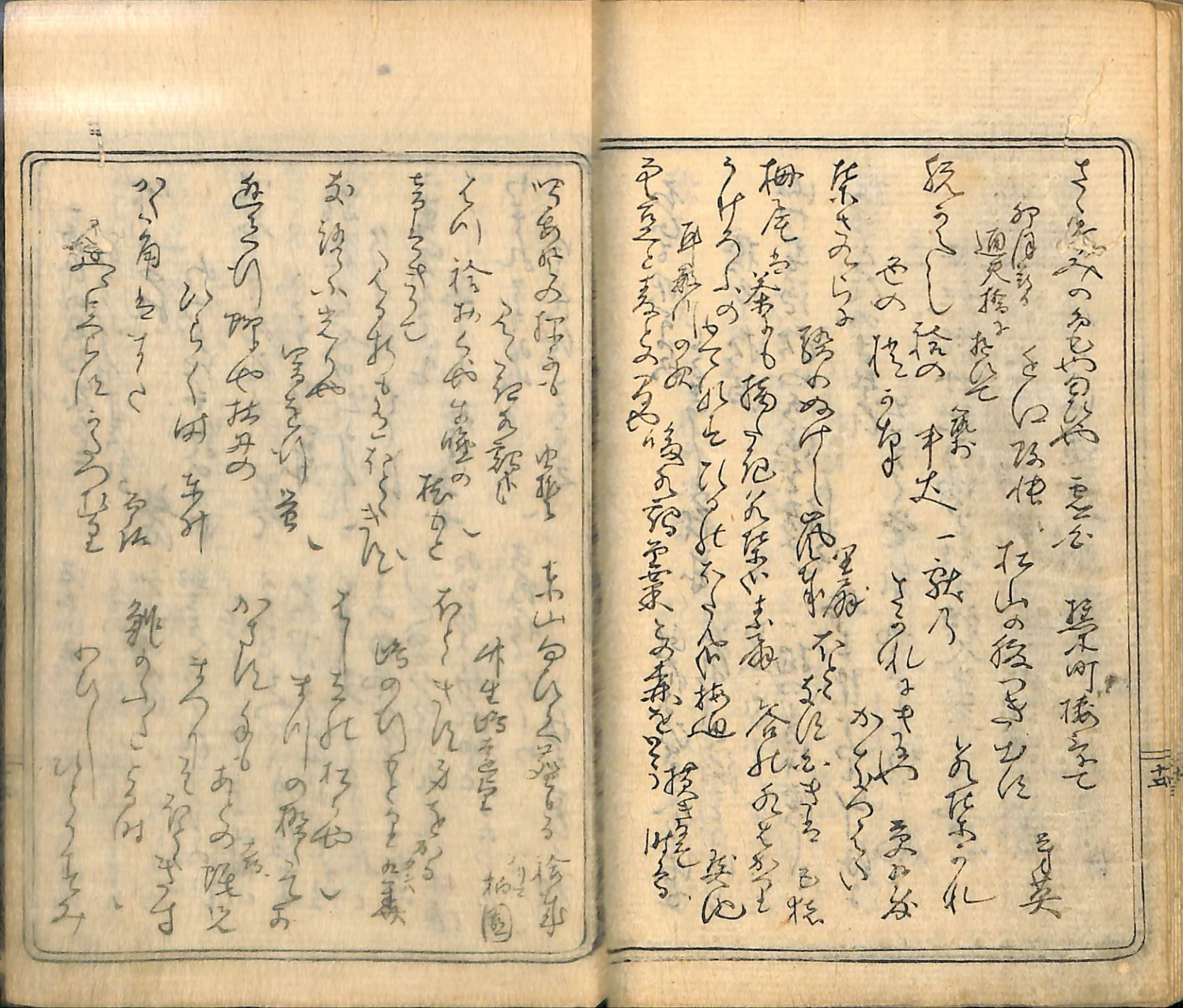
早起鄉舟赴君塢望臨海詩人来定口占題壁

湖面霞晴鏡如瑤群巒争影波心墮一元哉

此處之一層高海道無人稱蓬壝　竹兆岸述

河南よ後くる茶も酒も
花しくみを又庭を
とふ家もたえ人なき心
一枕の蒼紅嘆しき

此とて笑すつを升ほよ
出とろく営業やさしか
の桃



一代の思ひ出ちとを
はしらかけかきける
作の事れ　わづかの数のかぎ　[illegible]
咲ちて花の[illegible]　芭蕉
鶏[illegible]人の出入り、[illegible]枯野哉
[illegible]
二葉[illegible]を
[illegible]し　[illegible]
かまれて[illegible]と
[illegible]之、

塩[illegible]山王[illegible]祭八[illegible]より[illegible]
とての[illegible]
神[illegible]の[illegible]
[illegible]
しもすら八年[illegible]の
[illegible]人の[illegible]りて[illegible]
[illegible]やけ[illegible]の節ありて[illegible]
[illegible]年[illegible]
[illegible]の[illegible]八[illegible]あ[illegible]て[illegible]
くの[illegible]八[illegible]
[illegible]の[illegible]新[illegible]　[illegible]
[illegible]
一[illegible]

作の事にくたらし　芭蕉門人に[illegible]　[illegible]
つくらんとおもふの心　[illegible]
息てろ[illegible]　作の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

嵯峨にて　　　　　　　　　　蒼虎

宮帷或外ニ遊ぶ　蕪堂　数よけるやうにて身の宝、
茶の子も待つ　めくら見やならぬ事　ます旅よきを遠見ゆ　て新ちや、
入寒に西なる家の影き　三日月のむかふ楽しき
瓶正相上りて八坂殿　百々川まで見えし　　呆月
むさ法し、とありに今へ　こなたは有られて郭公
けりて女子生残りけり　とはふやくなるもなく
まさる紙に手もれくれし　赤名れ、四方の面見るもつ花のそれ
食の頃や小池の春れ　人とにかつ見る
　いと嬉しき　おのお家　紅さし　東麻　拭ひて
鉢ちや芒の句ひを起こなから　九養　風のまひいつ　大堰川晩景
木末より見えし法せて　草堂　拭ひて　蕪村　ゑ撒ちて寺堂

やちよ見て見る　西南花を見る山桜花　梅通
雲の上に　春待ちも鬼哉　隈もなく雨の中
世すてし付ると　堪かとと安らかや花さ、　からゆくは薄に心鳴や
とられたる旅路たる名ん　五斗　玄子、　三日月くちて　奇鳥
詠みけるとへ　三日月に　こらへきて　蒼よらぬ居る空
　葛籠の雅子も　洋英　山かへ雲を捨るを見て見　玄公
お捨らに見える来見やし　小池や　八ろうの神
雲に　白月　三日の葉の花き白月　百々又呼　米谷
晩秋産ながらり　蕪村　七夜の赤の亭主か　其角
　拾ひ行きと友だよ月　ゐけにそうた雨

稲の葉ハしらたゝ　梅角

月樹山眺望

杖先く雲の光りれ　峰くる雲むかしこよ　可年

道八くるし橋ゝ　爰も涼しさ　清水鴎　青莪

人もとかゝも　涼しさ吹くも竹の喋

あちこちも笑ふ　いつもるかな音の　夕顔かな

空もとうかさ　涼しや雲の月　梅径

宝に　水の音も言ふれ　呉明

吹あらく夜ぞ涼しゝ　清水をながれある　京ゝなる

絶えぬも水ふ風　まてこゝや涼しさ　素扇

絶え水を流れし　加茂川の拾ひつゝき

あくまし雲かくれ　梅志

なかれ夕立水　魚値

我しらぬ襟つくろひぬ　喜風

四條河原と云ふ田を一ッ手

さゝら浪涼の影ゝ　しでに野ふ薙は襟の風ゝ

少なから　すきゝぬ人影に八ちかし　素扇

月ね色涌き涼みてかゝ　なし川端涼　子興

朱雀ぞて夜涼し　鉾の　芳花

松風　夜半ぞこゝもとより　やまかぜつゝみすゝ

山寺

やまもあらし涼しさ秋風　良池

涼風も一人おもし　宮一ッの花

夫ともに涼しくのされて　これて松

あ橋てつれハ卯し　大かるも　ひらきにかゝる涼く　京中

橋の清幸若　　仙笠蕎麦

[illegible]

穀稲のうて風まねを拾ひつ流す　吹ちこえ涼風社蕤

まの出てもくる葉や拾ふ風　夜まれかみ東

霧桔

[illegible]

[illegible]

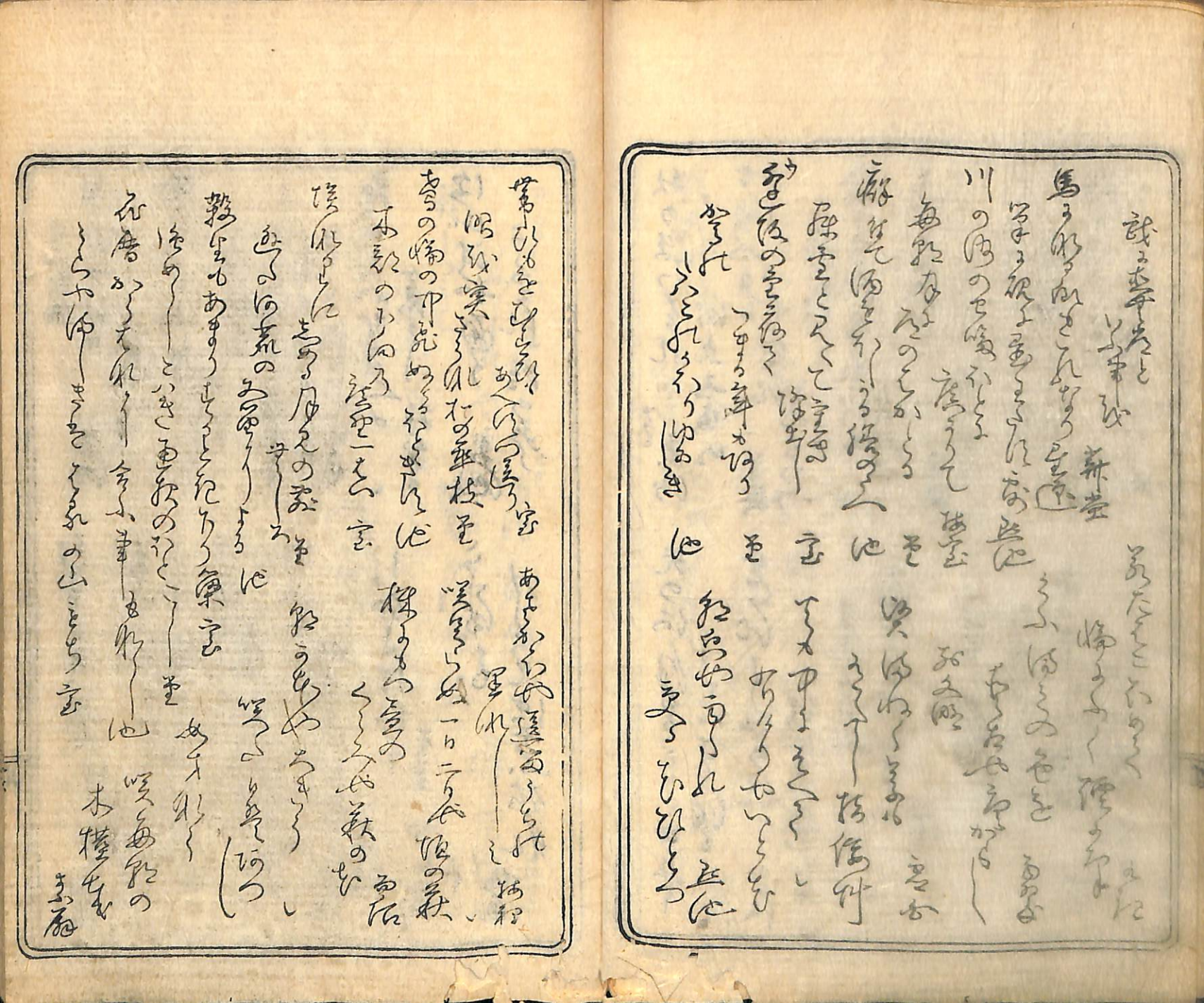
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

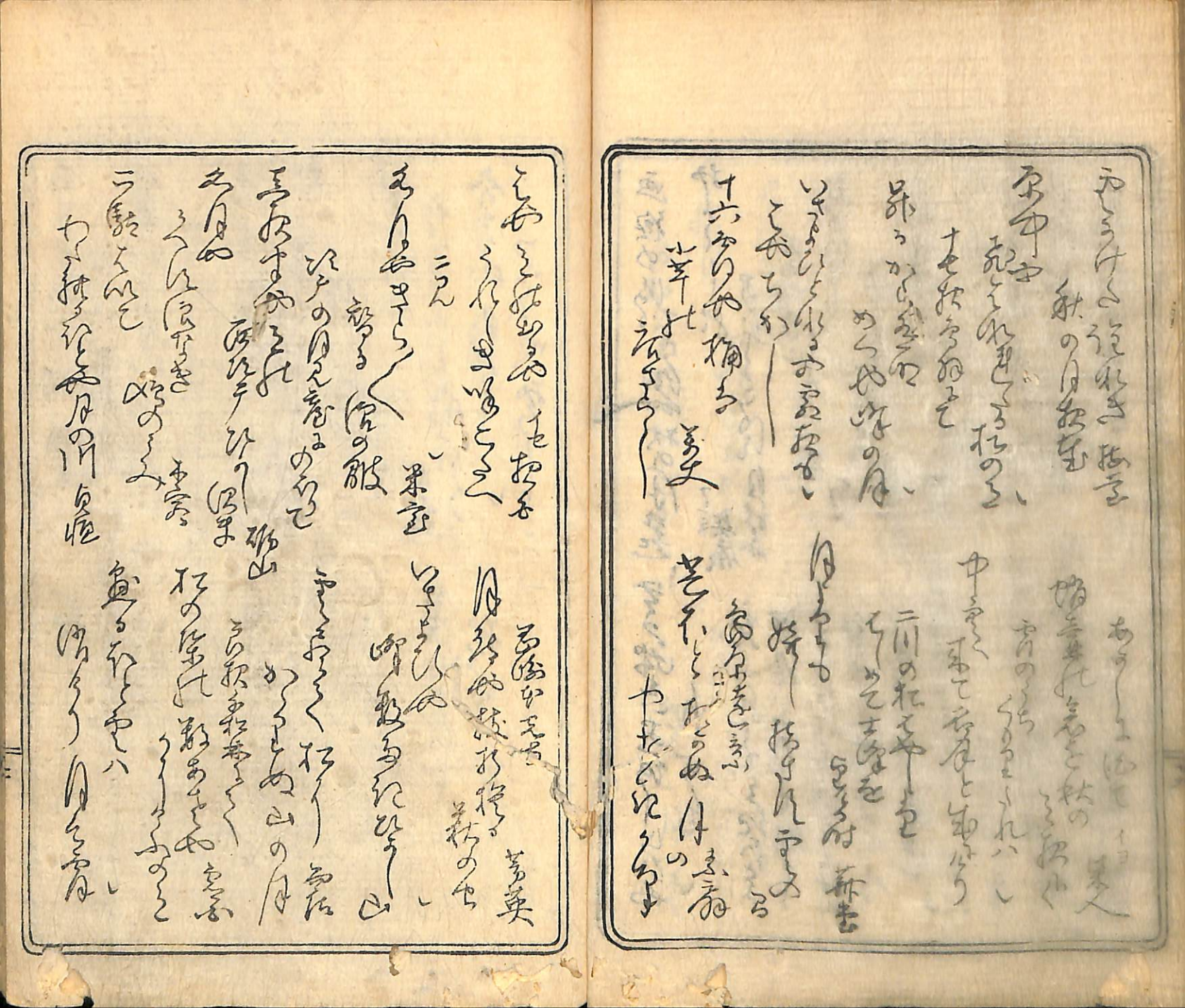
[illegible]

[illegible]

月の夜

月の夜

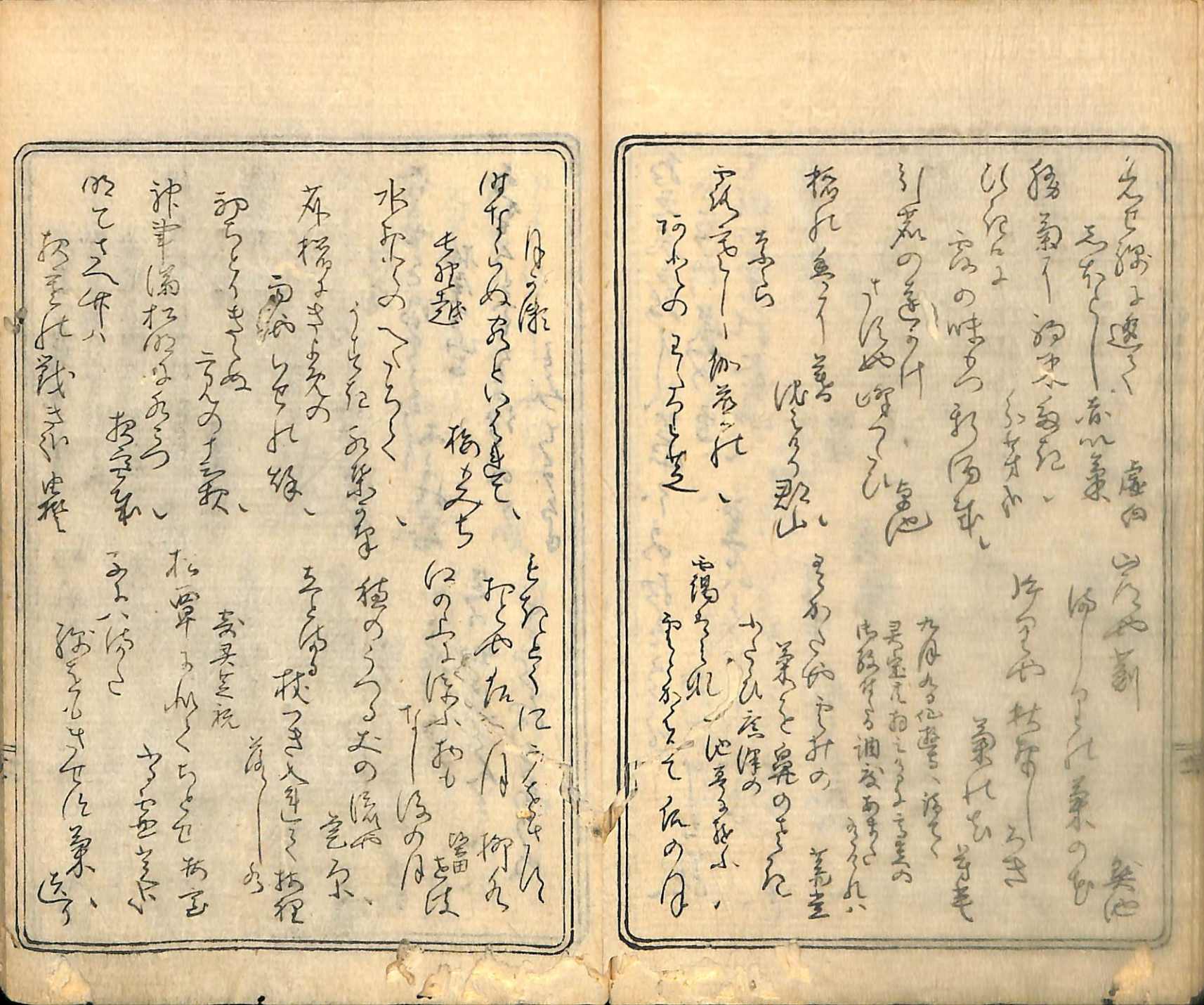
月の夜



[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

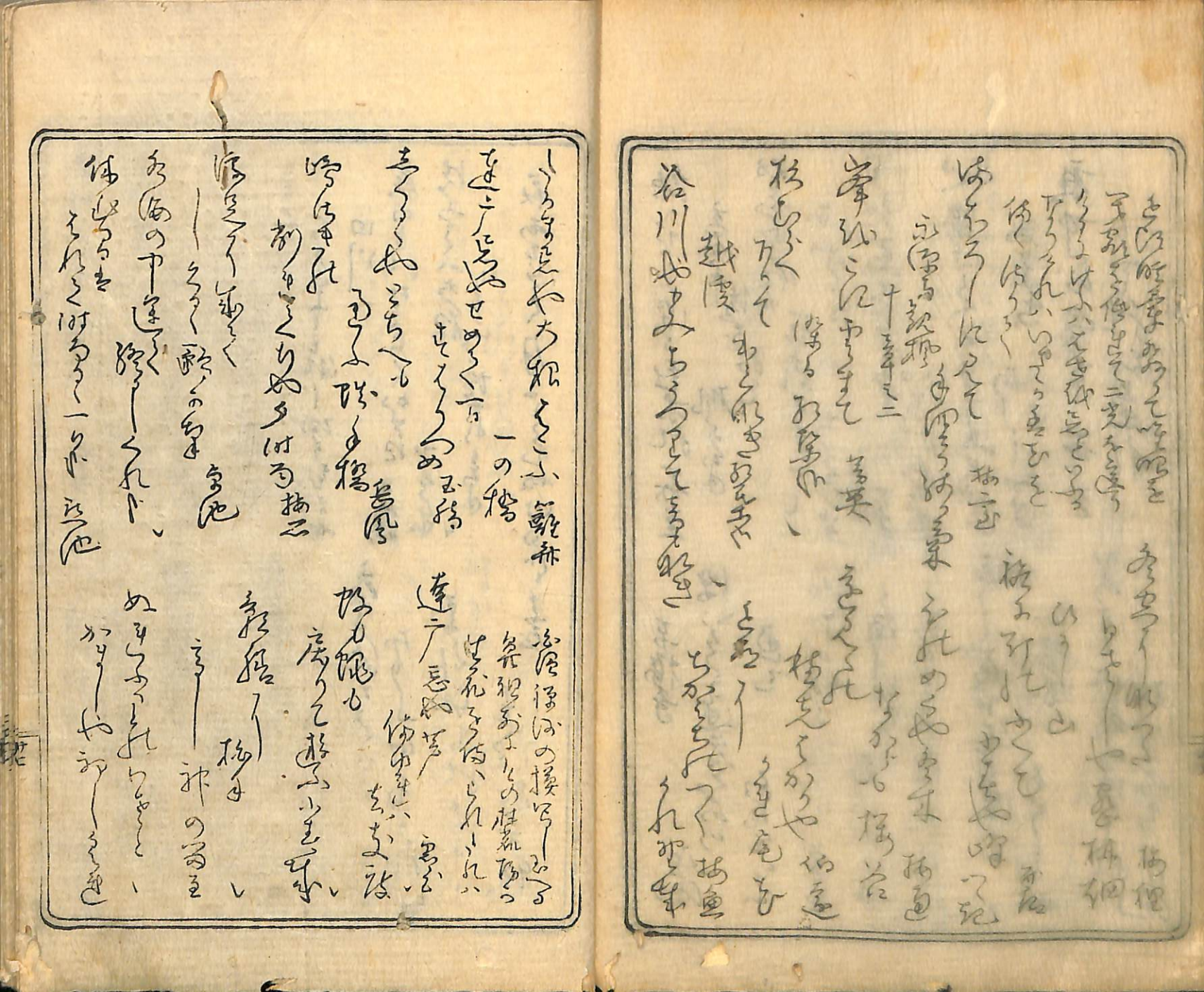
[illegible]

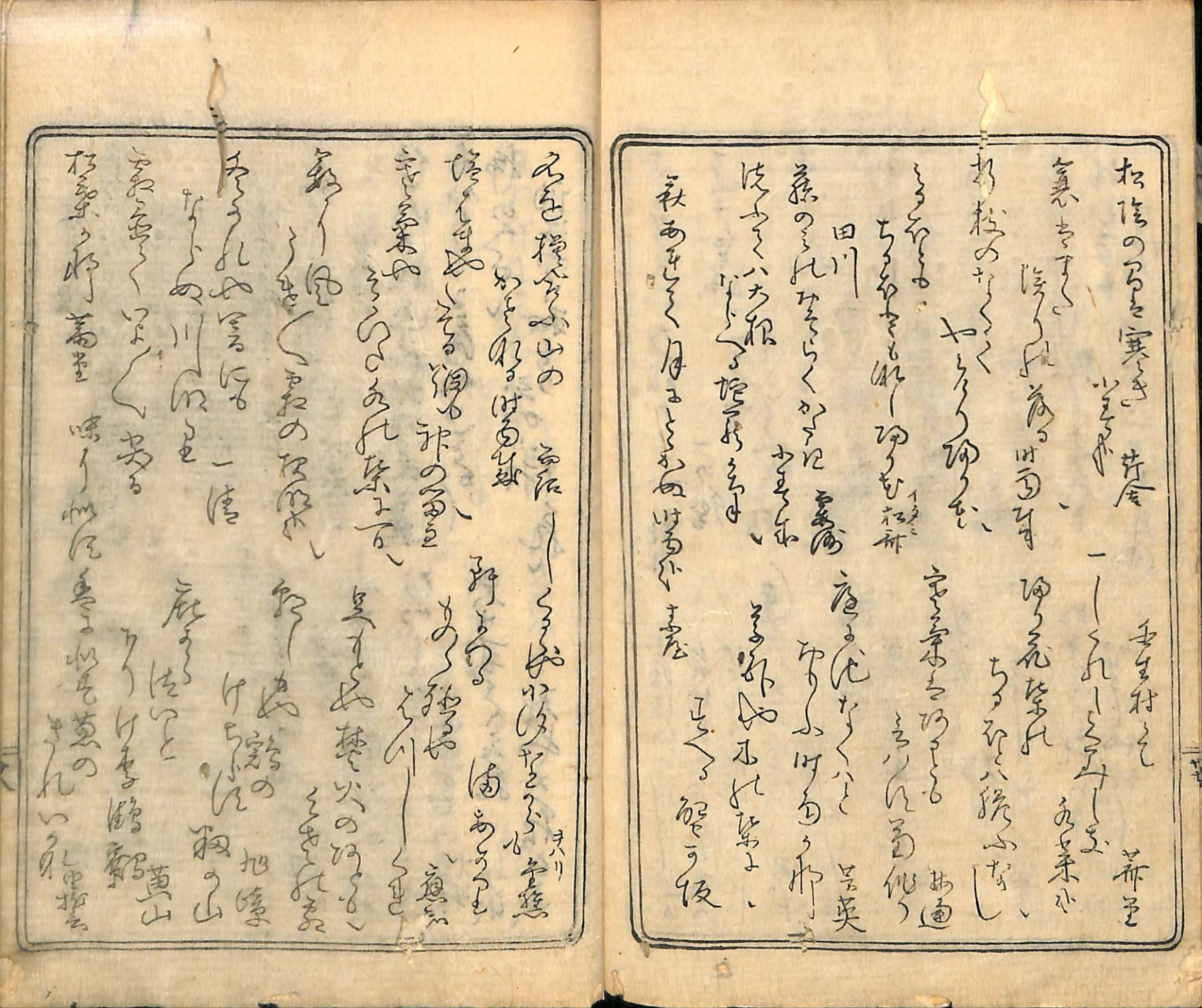
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]





[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世之人羞稱宋近富者、姑置之近事農富商、
往往唱俳句、自誇風流、而子弟輩、亦多倣傚、
且言或可補、而与其心行、不啻冰炭、友人默池生、
偶於東都由誓老人為人、見示所著俳文一篇、
余讀之感之、謂如此等、可以砭世俗之心病也、聞
老人須避世塵於城北荒川之上、潔庭著書
自適、豈其有以厭於川水者歟、因慫慂生、刻
附之一掬集文後、皆弘化己巳冬藜堂野夫識

一掬集二編

[illegible]

古絵名花梓

京三條通高倉角
丸屋善兵衛

仝堀川通二條南
[illegible]

大坂心斎橋筋角
[illegible]

文通取次不